Ⅳ　実施の成果

１．子どもの意識調査から

「公共性」に関わる意識調査を行い，子どもの意識・態度・認識の変容について一年次の実態との比較を行った。この意識調査には，調査項目が本校研究テーマと関連があると考え「相互独立的－相互協調的自己観尺度」（宮城学院女子大学教授　高田利武作成）を選んだ。この尺度は，個性的存在でありたいという相互独立的自己観と，社会的存在でありたいという相互協調的自己観を，ある個人がどの程度内面化しているかを問題としたものである。全20項目中，独立性を測定しているのが10項目，協調性を測定しているのが10項目ある。またこの相互独立性・相互協調性の因子分析をすると，相互独立性は「個の認識・主張」と「独断性」に，相互協調性は，「他者への親和・協調」と「評価懸念」とに分けられる。「個の認識・主張」というのは，自分は他の人とどれくらい違うかを認識しているかということ，「独断性」は自分のやりたいようにやることである。また，「他者への親和・協調」は他の人とどれくらい仲よくするかということで，「評価懸念」は人からどう思われているかを気にすることである。この尺度は，ある個人が独立的なあるいは協調的なものの見方をどの程度自分のものにしているかを測定するもので，それはその人の考え方または個性といえる。従って短期間で大きく変化するものではなく，それを踏まえた上で一年次の実態と比較した。

(1)　相互独立性・相互協調性の学年ごとの違い

相互独立性：学年，性別による，統計的に有意な差はない。

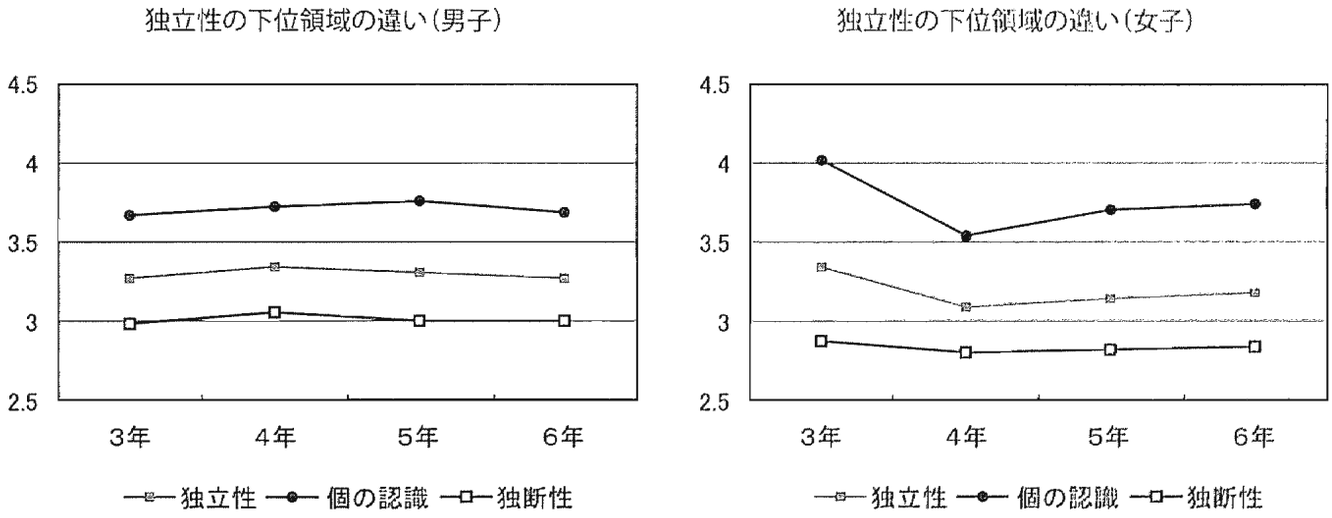
相互協調性：３年以外は女子は男子より高い。

女子は３・４年より５・６年が高い。

(2)　相互独立性・相互協調性の下位領域について

独立性の下位領域の違い

相互独立性：個の認識・主張と独断性の学年ごとの違い（2010年）

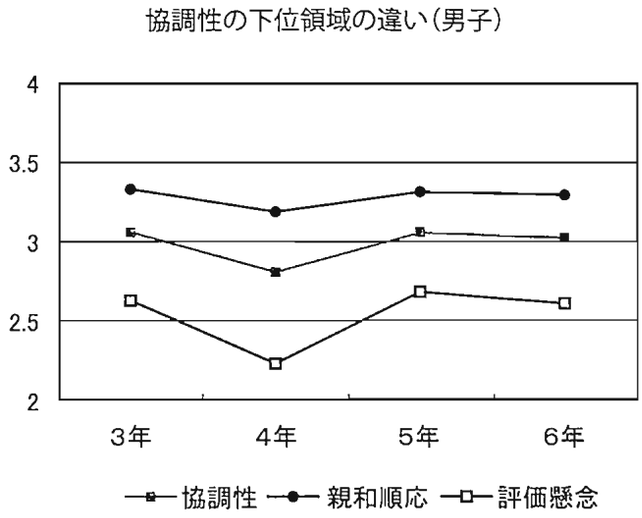


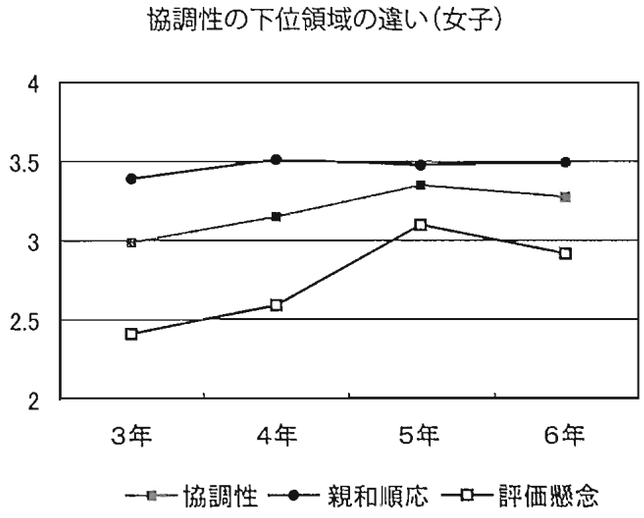
①　男女ともに，全学年で「個の認識・主張」が「独断性」を上回っている。

②　「個の認識・主張」は，学年・性別で統計的な差はない。

③　「独断性」は，全学年で男子は女子より高い。

協調性の下位領域の違い





① 男女ともに，全学年で「他者との親和・順応」が「評価懸念」を上回っている。

② 「他者との親和・順応」は，全学年で女子は男子より高い。

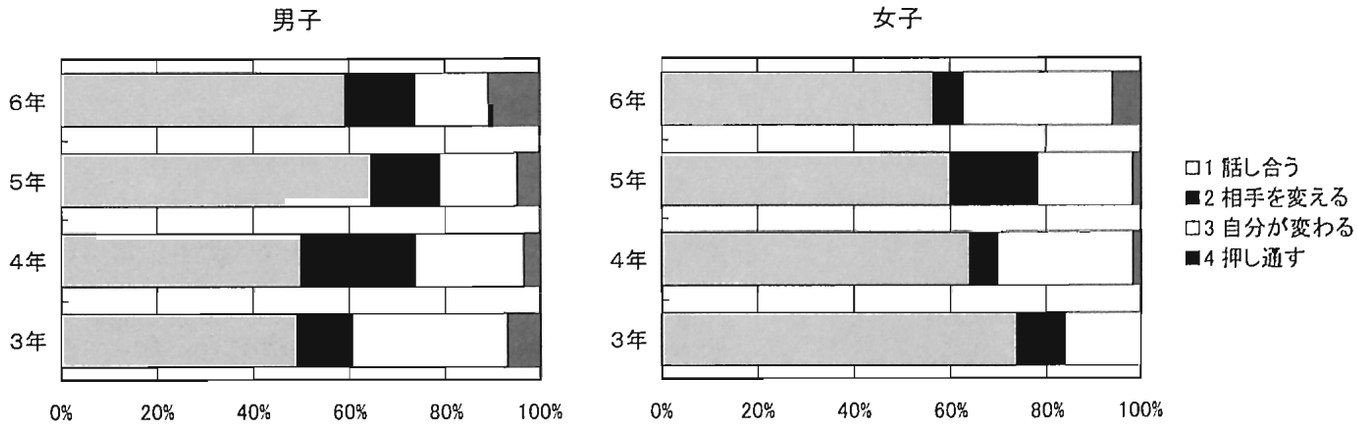
③ 「評価懸念」は，５／６年で上昇する傾向がある（特に女子)。また，４～６年では，女子は男子より高い。

全体の関わり方の意識としては，「周囲の目を気にせずに自分の考えをもって行動している子が多いが，並はずれた独断的な行動はしていない」ということができるであろう。そしてこれは，一年次の調査結果からの分析と大きな変化はない。

(3) 「友だちと意見が異なるときの行動」の回答傾向について

質問項目「友だちの考えと自分の考えが違うとき，あなたはどうすることが多いですか」の問いに対し，ア，相手の考えをもっとよく聞いて，もっと話し合ってみることが多い　イ，自分の考えをよく話して，相手に考えをかえてもらうことが多い　ウ，ちょっと違うと思うけれど相手の考えに合わせることが多い　エ，自分の考えを押し通すことが多い　という４つの選択肢を用意した。

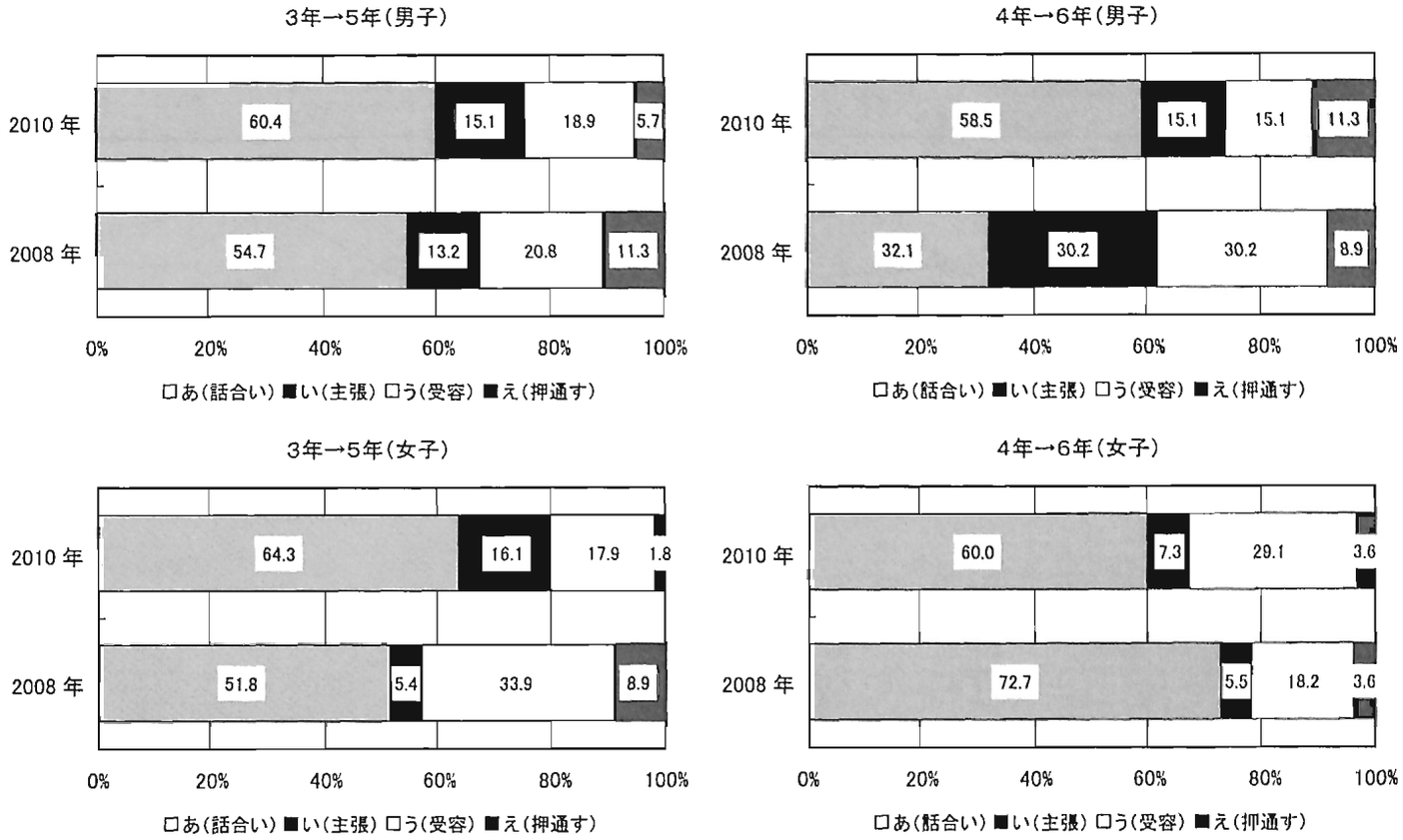
1．友達と意見が異なるときの行動（問 21）



どの学年でも，男女ともに「話し合う」が50%を超えている。話し合いで解決しようとする児童が多い実態を表している。

前回調査の回答の変化

1．友達と意見が異なるときの行動（問 21）の変化



① 3→5年では，男女ともに「話し合う」が増えている。

② 4→6年では，男子は「話し合う」が増え，「主張」「受容」が減っているのに対し，女子は「話し合う」が減り，「受容」が増えている。

3→5年の男女，4→6年の男子は「話し合う」が増えている。「押し通す」が減り，「主張する」が増えている。このことは，異なった見解に対して自己主張をしながらも意味ある対話で対処しようとする力が全体的に伸びたことを表す一例であろう。

4→6年の女子が「話し合う」が減り「受容」が増えているのは，「協調性」の中の「評価懸念」が増えていることと関わっていると考えられる。

(4) それぞれの行動の理由

あ：自分の意見を，もっとグループの人に聞いてもらいたいから

い：自分の意見や考え方にあまり自信がないから

う：自分は友だちの考えに納得できないから

え：友だちと自分の考えや意見を比べて，違う部分はどちらの方がよりよいかを考えたり，にているところはさらに考えを豊かにしたりできるから

お：友だち同士，自分と友だちの考えからの違いから言い争いになったり，けんかになったりするのを避けるため

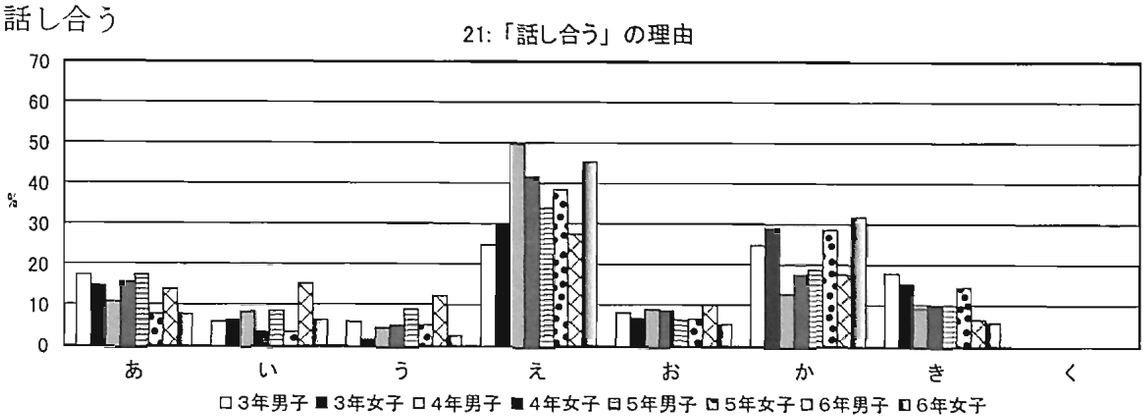
か：全員が納得するようにしたいから

き：意見が違っても，最後は仲良くなった方がよいから

く：自分の意見や考え方がいつでも一番正しいと思うから

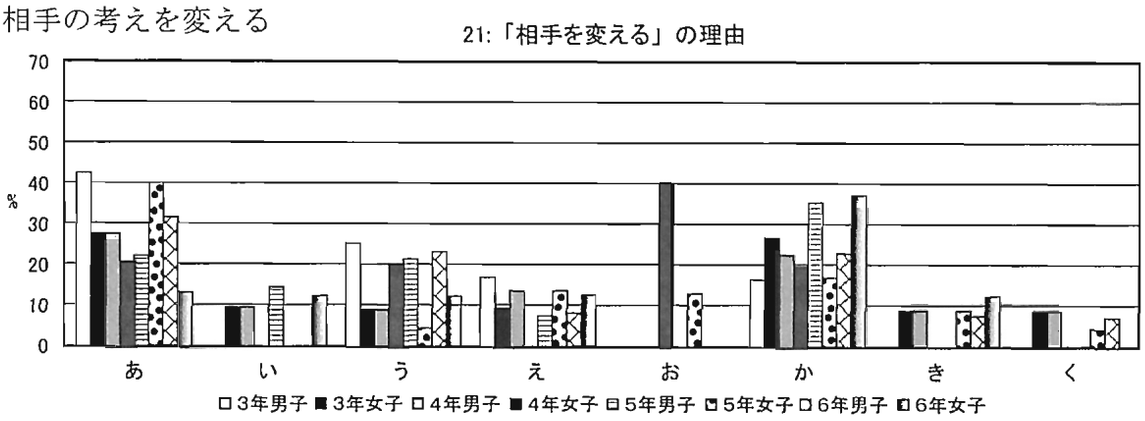
「友達と意見が異なるときの行動」

ア　話し合う



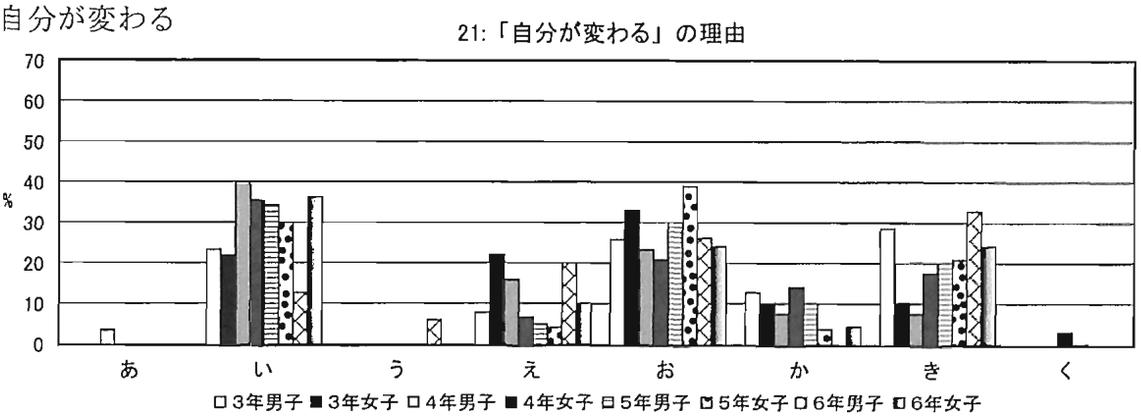
全体に「え：考えを豊かにできる」が多い。「か：全員納得を望む」が次に多い。

イ　相手の考えを変える



全体に「か：全員納得を望む」が多い。「あ：自分の意見を聞いてほしい」も多い。「う：友だちに納得できない」もやや多い。

ウ　自分が変わる



全体に「い：自信がない」が多い。「お：けんかを避けたい」も多い。「き：最後は仲よくしたい」が次いで多い。

全体的な傾向として，「考えが異なる」ことは「考えを豊かにできる」と前向きに捉えている児童がどの学年でも多くなった。話し合う理由を「考えを豊かにできるから」と意識している姿が明らかになった。ただし，合意形成をめざす気持ちが強くはたらき，自己主張をひかえる傾向が高学年女子にやや多くなる。このことは，協調性の高まりと独立性の関係という意味で，発達的・性差も含めてさらに個別の吟味が必要となる部分である。